障害を持つ子どもたちに職場体験のチャンスを

～就労支援の仕事を通して感じたこと

今村　井子

はじめに・・・

私は現在、就労支援員として、高崎市内の二つの養護学校高等部に在籍する生徒さんの進路開拓の仕事をしている。養護学校では、進路先を検討する際に、一人ひとりの生徒さんの特性や障害の実態、及び職業的適性を総合的に考慮しながら進路指導を行っており、その進路指導の一環として「現場実習」という取り組みを学校として行っている。

現在では養護学校に限らず、県下の中学校でも「職場体験実習」という形で実施されていることを考えると、学校教育の中でキャリア教育を推進していこうという流れは顕著になってきていると言えるだろう。

しかし、特別支援学校で行われている「現場実習」は、いわゆる中学生の行っている「職場体験」とは少し意味合いが異なっている。というのも、養護学校で行われている現場実習は（養護学校では現場実習と呼んでいる）一般の高等学校のように学校ごとに個別の求人票が来ないこともあり、職場体験といった意味と併せて、直接の今後の進路へつなげていくという意味合いもかねて行われているからである。

よって、私の仕事は、養護学校の進路指導部の先生方と共に、生徒さんの職場体験先の開拓を行い、生徒さんの今後の進路に少しでもつなげていけるような作業を行うことが仕事の根幹と言っていい。

障害を持つ生徒さんの就労支援の仕事をさせていただいて、はや８ヶ月。その間、私自身が仕事として取り組ませてもらった障害を持った生徒さんの就労開拓の現場で感じたこと、考えさせられたこと、学んだことは多くあった。それは同時に、私自身が職業生活をどう考え、どう尊重していくかという、私個人の生き方の問題にまで行き着くものだったようにも思う。以下、私自身がこの間、就労支援という仕事を通して感じ、学んだことをまとめてみたい。

１，「障害」でなく、「障害を持ち生きる生徒たち」に目を向けて欲しい

これまで、生徒さんの現場実習のお願いに様々な会社を訪問させていただいた。そして、実際に現場実習のお話を進める際に、一番私自身が説明に苦慮することが、「知的障害」

についての説明であった。特に障害を持った生徒さんの実習の受け入れを初めて検討される会社の方は、「知的障害」という目に見えない障害について戸惑われる方が多く、「障害」という一見マイナスイメージに不安をもたれれる方が多くいらっしゃった。

確かに、お会いした会社の方が、これまでの人生であまり知的障害を持つ方と接する機会がなかったとしたら、ある意味、無理のないことかも知れないとも思う。また、改めて「知的障害」というものが「目に見えない障害」だからこそ、口頭での説明の難しさも、現場で働く者として痛切に感じることになった。

しかし、一方で、私自身も苦手なこと、得意なことがあるように、生徒さんにとってもそれは何ら変わりが無いとも思うのである。まして、普段から養護学校の授業において、様々な作業学習に取り組んでいる生徒さんの中には、私よりもずっと作業に習熟している生徒さんも多いことを日頃から肌で感じている私としては、不合理な感覚だと思ってしまうのも本音としてある。

だからこそ、「障害」だけに目を向けないでほしい。「障害を持ち生きる人間」として見て欲しい。障害はハンディではあるかも知れないが、同時に、様々な個性や人格、人としてのすばらしさや若者としての可能性を秘めている生徒さんたちである。そこにもきちんと目を向けて欲しいと思うのである。もちろん、彼らが実力を発揮できるよう障害への理解や配慮は必要であると思われるが、それは合理的配慮であって、会社にとってもメリットにつながることであると思うのだ。

実際､今年９月までに連合群馬に寄せられた労働相談件数は過去最高の４２０件となり、労働環境は悪化の一途をたどっている。これは、すでに卒業し職業生活を送っている生徒さんにとってもたいへん厳しい状況が生まれていると言っていいと思う。原因の一つに職場での人間関係の悪化が伝えられていることを考えても、今こそ、働くことの充実感や喜びを共有できるような職場環境作りが求められていると言えるのではないだろうか。それは、障害を持つ生徒さんにとって、いい職場環境を作っていく方向性と同じであると言えるのではないだろうか。

２００６年１２月に採択された国連障害者の権利条約　第２７条　労働及び雇用　には「障害者が他の者と平等に労働についての権利を有すること」とあり、日本は２００７年の国連会議で署名している。そのことからも、今後一層、より発展的に推進していけるよう私自身も微力ながら努力していきたいと思っている。

障害を持つ生徒さんにとって働きやすい職場は、すべての人にとって働きやすい職場で

あり、労働環境の改善につながると私は思っている。

２，人間としての美徳　～「おたがいさま」「おせわさま」に込められたもの～

ある社長さんがこんなお話をしてくださった「人間は誰でも失敗する。失敗しない人間などいない。でも、会社にとってミスは時に命取りになる。だからこそ、ミスを出さないシステムを作ることが大事なんだ・・・。」と。目から鱗・・・というのは正にこのことではないかと思わされた瞬間だった。

１０年ほど前からだろうか。「勝ち組」「負け組」といった単純に人間を二分するような価値観や言葉が横行した時、「負ける事・失敗することへの恐怖」があおられ、金銭至上主義のような考え方がマスコミを賑わした時期があった。そのことは今になって思うと、ずいぶんと人々の心を窮屈にしてしまったように感じている。常に結果を出し、成功していなければだめだと・・即戦力でないと雇用は無理といったような、目の前の事象だけに振り回されてしまうような過剰な感覚を生み出してしまったように思う。

しかし、前述の社長さんのお話のように、人間は失敗するし、ミスを犯す。だからこそ新たな課題やシステムを生み出す力を持っていると言えるのであって、創造力や新しいアイデアはミスや失敗、苦労や努力の積み重ねがあってこそ生まれるのではないだろうか。

そんな時代背景もあってか、私にとって「おたがいさま」「おせわさま」には、人を思いやるゆとりが込められているように思うのだがどうだろうか。ミスがあっても、それが相手にとって次につながるミスであって欲しいと願うような、互いに協力し合おう、助け合おうというような積極的な精神を感じるのだ。実は私自身が、この就労支援の仕事を頂くまで、あまり口にしなくなっていたし、周りでも聞かなくなっていた言葉であった。特に「おたがいさま」は最近ではほとんど耳にすることが少なくなってきたように思う。しかし、「おたがいさま」に込められた人間の美徳とも言える精神は、これからの時代だからこそ大事にされるべき言葉ではないかと私は思っている。

昨年一年間に、自殺で亡くなった人は三万２千人を超え、うつ病をきっかけとした休業、失業で生じた経済的損失を併せて推計すると約二．七兆円にも及ぶとの報告が、今年初めて厚生労働省から出された。このことからも、人間を育てていく職場環境の整備は、「人育て」にかかっていると言えないだろうかと思っている。

また、ＯＥＣＤの労働生産性に関する昨年の調査によると、先進国の中で日本は最下位に位置し、諸外国と比べてもたいへん効率の悪い働き方になっていることが分かり、その

問題も改めて指摘されている。非正規労働者の増加は、人々の経済生活を不安定にしただけでなく、労働そのものも質の低下を招いたことにもなり、労働を尊重していくというキャリア教育にも反した現実と言っていいかも知れない。効率優先だけでない、人として成長していく職業人を育てるという会社としての誇り、そのための絶対的ゆとりを会社に生み出す努力を守るために、政府はもちろん、私たち一人ひとりにとっても皆の職場を大切にしていく意識が必要だと思えてならず、そのためにかつての日本が普通につかっていた「おたがいさま」の精神を生かしていけたらといいのではないかと思っている。

３，生きていることに「普通」はない　生きていることは奇跡である

私自身、この仕事に就いてから八ヶ月が経ったが、先日、突然自分でも思いもよらない不安感に襲われることがあった。それは、これまでの私の人生の中での感じたことがなかった不安感であり、たいへんとまどいを感じた。有り難いことに進路の先生方に心情を包み隠さず吐露することで、「また、頑張ろう」といつものように仕事に戻ることが出来たし、今振り返ってみても職場での人間関係に支えられているという有り難さを身にしみて感じている。さて、その不安感とは何か。それはまさに今の新卒学生の皆さんが直面している不安感ととても似ているものではないかと、今は感じている。

就労支援の仕事は、求人広告やハローワークでの求人情報を頼りに、直接会社に出向いたり、お電話を入れたりして、現場実習の依頼を行うのが主な仕事である。しかし、今の経済情勢では、なかなか景気回復の兆しが見えず、厳しいという状況は続いていると言っていい。十社問い合わせて、そのうち一社でも返事が頂ければいい、といったような状況である。直接、会社の方とお話ししてもその大変さが伝わってくることが多く、「もう少し景気が好転したら協力したい」という話もよくお聞きし、、良心的な会社はまだまだあるなあ、ありがたいなあとも実感している。

しかし、ある時さすがに、会社から断られる回数が重なったり、ご訪問のタイミングが悪かったのか話をする余裕がなかったのだろう、心ない言葉を投げつけられた事が重なった時に、自分自身の存在意義、自尊感情がぼろぼろに壊れる瞬間を経験することになった。それは、わたしがこれまで経験してきたことの無かった感情といってもいいかもしれない。

連日、誠心誠意話をさせてもらっても、断られ続けることの気持ちの様は、私の想像以上のダメージの大きさだった。それは仕事の厳しさであって、そこから学ぶこともあるということを否定する気はない。ただ、本人のやる気があっても常に断られ続けることのつ

らさや大変さを身にしみて感じたのも事実だった。これまでの私だったら、きっと就活で３０社の面接をし内定をもらってない学生さんの話を聞いても「また頑張ればいいじゃん、気にすること無いよ」と軽く受け答えしていたはずだから、心底反省させられた。と同時に、今の時代の就活の大変さを考えると、生徒さんのやる気を削ぐことがないよう、頑張れば報われるというごく当たり前の社会に、回復して欲しいと切に思う。

私事で恐縮だが、私の二人の息子たちは２歳と６歳でやんちゃざかり、仕事と育児のまっただ中のめまぐるしい生活を送っている。子どもを産み育て、改めて教えられたことは、生きるということ、その貴重な営みである。日々を重ねることを、まるで当たり前のことのように独身の頃は感じていたが、生きることは奇跡に近いことなんだと育児を通して何度も思わされる瞬間があった。こんなに小さな子どもでも、自分を尊重して欲しいと思い、人との関わりを求め、他者に認めて欲しい（何かの役に立ちたい）と行動してる。それは、きっと人が人として成り立つための根源的な感情といえるのではないだろうか。だからこそ、一人ひとりが成り立ち、支え合うことで、より良くしていこうという社会や環境のもとで初めて成熟していくのだと思う。

受精という生物学的にも奇跡に近い出来事を通してこの世に生まれ、また、この世に生まれ出た後も奇跡的な出来事の繰り返しにおいてはじめて、いのちを長らえていくという事実。そのことをすべての人が受け止め、社会の中で、より良く誰もが平等に生きることがあたりまえの社会になるように、一人ひとりのいのちが真に尊重される社会を目指せるように・・・そう心から願って止まない。

＊補足

文中、「障害」という言葉を使わせてもらっているが、害という漢字が使われており、私自身適切とは思えなかったが、現段階で「障害」に代わる言葉が見あたらず、そのまま使わせていただいている。現在、欧米で使われている「チャレンジド」（挑戦する人）といったような意味を成す言葉が日本にあればいいのにと思っているところである。